

も大切な点のひとつだと考える、綱の寿命についてである。「見解」が問題にしているのは新品の性能であるが、性能の低下は一律ではない。製綱業者により、また銘柄の違いにより、性能の低下度の違いは、われわれは経験によって知っている。しかしそれを数字に現わして廃棄時期を決めることは難しい。登山者の持っている綱は、使用第一日を除いてすべて中古品である。だからわれわれの知りたいのは新品の性能ではなく、中古品の性能なのだ。

昔ロウプを初めて山で使うまえに、使いやすくなるため、湯につけたり、棒でしごいたりした。筆者はこれはロウプの衝撃吸収能力を捨てることだからと厳しく禁じたが、昔のロウプの大部分は、手に負えないほど堅かったのである。制動確保を行なうことは、綱をしごくのと同じである。一回ごとに寿命がすりへっているのである。しかも、次に述べる融断とも関係があるので、ないがしろにできない。

ロウプの廃棄時期については、真面目な登山者は昔から考えているので、いろいろの説はあるがなかなか納得できない。最近では雑誌 Mountain の二〇号に、衝撃試験のときの強さに応じて、使用時間をいくらと決めるような方式や、中古ロウプの破壊試験など紹介されていて、ヨーロッパではなかなか熱心に研究されていることが知られる。わが国の業者や研究者にも頑張ってもらいたいと思う。

本誌一九号で安田武氏は昭和四十五年の事

故に関連して「事故ザイルの切断端は融断によるものであると考えられる。しかし、衝撃破壊による融断ではなく、摩擦発熱による融断である」と推論し、ナイロン・ロウプで制動確保を行なうことは、カラビナのような滑らかな物体が仲介に入ったとしても、非常に危険であると示唆されている。これは大変重大な報告である。

もし、この通りだとしたら、ナイロン・ロウプは山では使えないものにならないことになる。恐らくこの報告は三重岳連もロウプ業者も眼にしていることと思うが、ひっそりとほっておかれているのが不思議だ。私は今回「見解」に関連して読んだり考えたりしたことの中で、これが一番の問題のような気がする。失礼ながら安田氏の杞憂であってくれれば幸いである。

「見解」の主張するような調査研究の必要ないことはいうまでもない。しかしそれを商品たるロウプにつけることには多少の疑問があること前記した通りであるが、単純でない自然たる山でのトラブルであるから、後から後へといういろいろな問題が現われて来よう。

とすれば「見解」で言及された程度の説明書は、きわめて舌たらずのそしりは免がれまい。大体、商人（製造者を含めて）というものは客をだましやさいものである。こんなことを書いては正直な商人から叱られるかも知れないが、かなり良心的なメイカーでも、素人の客が心配の種にするような問題点は伏せておくのが普通である。その商工業者に、

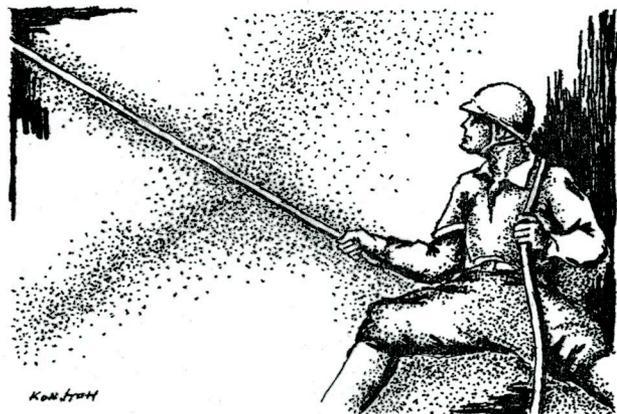
あけすけに商品の欠陥を示した説明書をつけて売れというのは、どうもおかど違いのような気がする。

今後、ロウプの性能が一層詳しく調査され、これが登山者に知らされたとしたら、山でのロウプ切断事故はなくなるであろうか。筆者はそうは思わない。遭難はロウプの物理的性質だけが原因で起こるのではなく、物理的性質の限界以内で用具を使いこなせない登山者の未熟から起こるものである。性能を知ることと、用具を使いこなすということとは、全く別の次元に属する問題である。

「見解」は岩角におけるロウプの危険を主たる問題として取りあげている。これは解明されるべき重要な問題であるが、解明されるまで登山を休業するわけにはいかない。そのときにロウプ切断の予防上最も大切なことは、初めに詳しく論じたように、直接確保をつとめて避けることである。ロウプが岩角に触れるのはあたりまえだ、というような態度を捨てない限り、ロウプ切断事故の続発は必至である。

《付記》 前号「見解」六四頁には「岩角が相当に鋭くても長さの方向に走ってくれば安心」という文章と同趣旨の記事を、筆者が日本山岳会々報一八七号に書き、一八九号で訂正したとして、篠田氏に対し「この文も当然訂正されなくてはならない」ときめつけている。しかしそのような事実はない。三重岳連の勘違いであらう。

（かねさか・いちろう 日本山岳協会常務理事、用具担当）



# 登山綱——強度と確保の問題点

前号、三重岳連の「見解」を読んで

現状では制動確保以外によい方法はない——ナイロン・ロウプの欠陥は欠陥として、確保技術にも問題があるのではなからうか。

## 金坂一郎

### トップの墜落をどう止めるか

急斜面を登るトップが落ちた場合、その墜落を綱で止めることは可能であろうか。この問題は戦前より、長い間の私の懸案であったが、昭和二十三年、病を得て暇のできた折、じっくりとこの問題に取りこんで見た。その結論は日本山岳会の『山岳』四八年に発表した通りであるが、意外な結果がたくさん現われて来たのである。

当時使用されていたマニラ麻の綱を使って、急斜面を直登するトップの墜落を、直接

確保によって止めようとすると、綱は確実に切断するはずだ、というのがその結論のひとつであった。

この頃、登山用語の使い分けがかなり乱れているようなので、直接確保の説明から入らなければならないようであるが、これは綱で行動者を確保するとき、確保者が綱を直接に岩角やピトンなど弾力の少ない物体に巻きつけたり、結びつけたりする確保法である。これに対して間接確保というのは、墜落者に続く綱をまず確保者の体や腕にからませて、墜落の衝撃が直接ピンに至らないようにする方

法である。直接確保は経験のない人が考えると、間接確保よりも確実なように思われるが、墜落のショックがほとんど緩衝されないで、綱の切断の可能性が多い。

急斜面での墜落で最も激しいのは、直登していて綱の長さ(L)の二倍だけ落ちる(H)ときである。すなわちH/Lの場合である。このとき落下の距離と綱に現われる衝撃力とはあまり関係なく、一〇倍でも三〇倍でも大差ない。もちろん落下距離が一〜二倍といたった小さな場合には、墜落者の体の弾力が効いてくるので衝撃力は緩和されるが、ある

程度以上の落下距離に対しては、衝撃力はほとんど同じと考えられる。いいかえると、一〇〇ポンドの墜落で切れた綱は、同じ人が一〇ポンドの墜落で切れるはずであるし、一〇ポンドの墜落に確実に耐えた綱は、一〇〇ポンドの墜落にも耐えるはずである。

確保の力学を調べて見ると、このように奇妙な定理がいくつも現われてくるが、要するに、登山用のマニラ・ロープは直接確保を用いる限り、 $\Gamma$ の墜落によって確実に切断するはずだ、ということが判った。

その頃ポツポツ紹介されたナイロン・ロープについて見ると、綱が理想的な状態で使われるとすれば、普通の体重の登山者を直接確保によって止められそうだという計算が出た。綱は結び目やカラビナでの屈曲によって強度が失われるものがあるが、実地の使用ではこうしたものが常に伴うのであるから、ナイロンといえども確実とは思えなかった。また抗張力の大きいナイロン・ロープが、切断前にやっと衝撃力に耐えたといった状態では、むしろ墜落者がロープで怪我をするとか、ビンのほうが破壊されることも考えられる。

つまりナイロン程度の性能の材料を使ったのでは、直接確保による墜落者確保は困難で、また間接確保にしても従来のボディ・ビレイ程度では、衝撃吸収力は極めて僅かであること、簡単な計算で判明した。

リーダー（先頭者）は絶対に落ちてはいけなから、という原則をここで再認識したわけであ

るが、何とかしてこのトップの墜落を止める方法はないか、さんざん苦しんだあげくに発見したのが制動確保である。この方法に着想したのは私だけではなく、古くは第一次世界大戦の前にG・W・ヤングが制動確保と同一原理の方法でマロリーの墜落を救ったことなど、後から知られ、またアメリカでも私と前後してこの方法が研究されていた。ヤングはこの方法をとくに命名してはいないが、米国の若者たちはこれをダイナミック・ビレイと呼んでいる。最近の英国ではスライディング・アレスト、あるいはフリクション・アレストなどと呼ばれている。

その後登山綱の品質は向上していることと、思うが、直接確保で $\Gamma$ の墜落を止めるのはまだ無理がある。被確保者の体にも、ビレイイング・ビンにも大きな力がかからず、すませるためには、張力対伸びの特性カーブが、従来の綱とは根本的に違った新しい材料が要求される。従来の綱を使うためには、現在のところ制動確保以外にはうまい方法がない。

ここでしばらく、登山綱の起原について振り返りかえて見よう。ここでは登山技術史的に厳密な考証を行なうわけではなく、多分に筆者の想像を混じえての話として聞き流して頂きたいが、ヨーロッパで登山のために水河地帯を歩き始めた初期に、登山者は長い木の棒を用いた。これは杖にもなるし、また前後の人が一本の棒につかまれば、ヒドン・クレヴ

アスを踏み抜いたような場合にも助けとなる。このような使い方をした絵が残されているのをご承知の人も多いであろう。

次にこの棒が綱へと進化した。綱ならば胴にしばりつけることができ、確実であるし、屈曲も自在で便利になった。綱が用いられ始めると、その太さや長さがまず研究課題となったであろう。もし綱の用途が、先行者が後続者を助けるとか、ヒドン・クレヴアス踏みぬぎを止める程度のことであるならば、直径一〇、強のもので、立派に役に立つであろう。登山綱の太さはこのようにして定まってきたのではなからうか。

とすればこの太さの綱は、先頭者が急斜面で墜落したとき、後続者がこれを止めるといった激しい衝撃を考えて選ばれたものではない。もともとは、先行者が後続者のスリッパを止める用具と考えるべきであるが、現実にはそのままの太さで、急斜面の激しいクライミングにも用いられるようになって来た。

ここで承知しておかねばならないことは、このような綱を選んだのは登山者であり、ロウプ・メイカーではあるまい、ということである。その登山者の選んだ綱が、初めの用途とは違って、激しい衝撃を受ける可能性のある所にまで持ちこまれるようになった。ここから登山綱切断という悲劇が始まった。そのように私は解釈している。

綱をさかんに使うのは船員である。職業上使用するのであるから、綱の理論上の強度など問題とする以前に、各種の状況での切断のしか

たを体で承知している。その船員がかつて筆者に登山綱の太さを質問したので、三分五厘のマニラだと答えたら、その細さにびっくりしていた。船員の考える命綱としては、岩登りでの五〇〇〇などという激しい衝撃など考えていないが、それでも細過ぎると直観的に感じるのである。

このように見てくると、かなり改良されたといっても、今の登山綱は水河用か後続者確保用であり、もしこれを先行者確保に使うとすれば、制動確保が上手に行なわれなければならない。

制動確保の普及講習会での経験であるが、まず受講者は本能的ともいえるほど間接確保や制動確保を恐れ、綱を岩に捲きつけたがる、あるいは手で握るにしても綱が全く流れないように固く握りしめて、その反力で体の態勢が崩れてしまう。自転車やスキーの習い始めに、わざわざ電柱のほうに寄って行くような身のこなしになると似ている。綱の通し方にしてもそうである。綱が岩の上をはっていったほうが、いざというとき心強いような気になるが、本当は綱はできるだけ岩に触れないようにしたい。

その教授法には大分苦心したのであるが、正しい理論を与えて本能的恐怖心を抑えるとともに、間接確保に徹した上で制動確保をマスターさせるように努めた。登山とかスキーの技術には、本能的動作と相反したものが多いため、中途半端な練習で実地に使うことは

禁物である。その反面、基本さえマスターすれば、次々に応用技術を開発して行くことも可能である。

以上のように見て来て、急斜面における先頭者の墜落を止めることは、現在のところ用具の問題というよりは、むしろ技術の問題であると筆者は考えている。用具に対する関心を無視するわけではないが、要は腕次第ということになる。

### 直接確保の危険性

登山綱切断事故のあらかたは、直接確保の状態か、あるいは本能的確保動作によって直接確保に近くなって起きている。

例えば、ランニング・ビレイという方法がある。これはピトンまたは岩にかけたスリングにカラビナをつけ、これに登山綱を通す方法である。こうすると先頭が落ちたとき

「ハ」となって、綱に現われる衝撃力が小さくなるというわけである。ランニング・ビレイそのものは正しく操作されれば、制動確保を容易にしてくれる。しかしもし確保者が、本能的動作によって綱をしっかりと握りしめてしまつたら、ピトンは単なる直接確保の支点となり、衝撃力の増大をもたらす。このピトンにかけたカラビナはラナ (runner) と呼ばれているが、ラナが滑車のようなスムーズな動きを示してくれるためには、確保者によるロウプの適度の放出が必要である。

つまり同一の方式を採用しながら、一方は立派な制動確保が実現し、一方は直接確保と

なって綱の切断に至る。このあたりに登山綱切断の重要なポイントがあるような気がする。

ナイロン・ロウプ切断事故の当事者は、いづれもロウプ切断時にショックを感じなかったと報告している。これはどういうことだろうか。もし字義通り全くショックが現われなかったのであれば、そのとき綱を握らずにほっておいたとしても、綱は一つも流れ出さずに切断したはずである。このようなことがありうるかどうか、これは適当な岩角を設定した実験装置によって調べて頂きたい点である。従来の切断実験はすべて直接確保の状態で行なわれているが、無確保の状態でも実験してほしいのである。あるいは前号六六ページの図でいえば、3のストレーン・ゲイジを1のあたりに挿入して、どの程度の制動力をかけるか調べてほしい。

次に、もしも当時の確保者が、強い緊張のもとに綱をしっかりと握りしめていて、多少のショックを感じなかったということであれば、これはランニング・ビレイの不成功によって、制動確保が直接確保に変わった例であり、そのために綱の切断を生じたこととなる。しかし、このような問題については仮定の上の議論をいつまでも続けても意味が薄い。切断実験の結果が望まれる。装置は特別に変える必要はあるまい。ただ無確保とか、制動確保の状態での実験を岩角類似の装置において試みてほしいのである。

このように見てくると、岩登りにかける直

接確保がいかに危険であるかということが明らかであろう。直接確保による危険の軽視はどこから始まったか。原因はいろいろとあろうが、私は自分の経験から、登山技術書の害を強く感じている。過去の技術書をひもといて頂きたい。直接確保の危険を強く指摘しているものは少なく、ひどいものになると、完全に綱が切断するような確保法を紹介している例もある。ヤングのマウンテン・クラフトのように優れた技術書は、名声の上ではたえられておりながら、難解なためか正しく紹介されていない。そして絵がたくさん入った判りやすい（優れているかどうかは別として）本の内容が無批判に輸入されて来た。これはもちろん日本人だけのミステイクではないが、猿真似の上手な日本登山界にとくに顕著に現われたようである。

以上、登山綱を考えるにあたって大切な諸問題を拾いあげて来たが、そのうちとくに重要な点だけをここで整理しておく。

(一) 登山者が確保用として使っている綱は、水河上での踏みぬきとか、後続者スリップ程度の、あまり激しくない落下を止めるのに適している。

(二) 今日の改良された綱は、直接確保によってH/T=2という激しい墜落をも止める可能性がある。しかし、そのとき発生する衝撃力によって被確保者は傷つきやすく、ビレイニング・ピンは破壊されやすい。つまりこのやり方では危険である。

(三) 先行者墜落の阻止は、制動確保を用いることによって従来の綱でも可能になった。

(四) そのためには極力間接確保の状態を保つべきで、直接確保的操作を行なうと制動確保が実現せず、綱の切断に至りやすい。

(五) 登山者は、本能的に、また誤った技術的先入観によって、直接確保的動作を取りやすい。

### 欠陥は欠陥として

昭和三十年一月二日、前穂高東壁におけるナイロン・ロウプ切断事故は、登山者すべてにとって衝撃的な遭難であった。麻にかわるナイロンが結構すぐめで紹介されていた折、想像もできないほどのあっけない切れ方を示したと報告されたからである。人間が浅はかな智慧によって作りだした合成物質などというものは、いずれ、ばけものか何かのように、人間にアダをするのではないか——そういった印象を私は強く持ったことを記憶している。

本誌前号における三重県山岳連盟「ザイル事故を防止するために必要な措置についての見解」（以下「見解」と略称）は、またまた現われたナイロン・ロウプ切断による死亡事故をきっかけとして発表されたものである。

「見解」では法規の問題として議論を進めているようである。こうした行き方も必要になつてくるかも知れないが、門外漢たる筆者に

は関係ないことである。ここでは筆者はスपोर्टマンとして、また多少エンジニアとしての感想を述べたい。

まず筆者は、外国の登山技術書ではナイロンがどのように評価されているか調べて見た。外国といっても語学の都合上、英語圏に限られるのであるが、まずイギリスの場合、比較的新しい技術書として C. Evans, *On Climbing with G. Francis, Mountain Climbing, A Teach Yourself Book* の二冊が手許にあったので読んで見ると、岩角における欠陥その他の弱点が詳しく紹介されていた。そこに書かれているようなことを忠実に守れば、綱の切断といったことはまず考えられない。

ついでに、ヤングのマウンテン・クラフトを見たら、ナイロンの欠陥がほのめかされているので驚いた。著者は今世紀の初めに活躍した登山者であるが、一九四九年に改訂した著書の中で、近頃ランニング・ビレイ用にスリングが多用せられているが、これは岩に直接かけられるので切れやすいものであると注意し、最後に especially if it be of nylon とつけ加えられている。

次はアメリカの場合であるが、近頃ではなかなか立派な登山技術書が発行されるようになったにもかかわらず、不思議にナイロンの欠陥に触れているものはほとんどなかった。いって見れば、何ごとも結構すぐめの米国式の広告をそのまま写したようなものである。お国柄の違いによるものであろうか。

物を売る商人は、商品の欠陥を買手に知らせる義務があるのか。あるとしても何処まで知らせなければならぬか。法律の問題は筆者の手には負えないから専門家に考えて頂くとして、ここでは一応ほかの商品の例をとりあげよう。自動車のハンドルを切った状態でブレーキを踏んではいけないという事は、高速運転をする連中の間では鉄則として守られているが、ことに路面が濡れているようなときこんな操作をしただら簡単にスピンを起こし、どんな名人でも手がつけられなくなってしまう。しかし、こうしたことまで教える自動車教習所はあまりないと思うが、自動車のディーラーは、こうしたことを客にこと細かに知らせる義務があるのか。ちょっと似た問題だと思つて挙げておく。

外国製のロウブには詳しい説明書がついているものがある。試験方法についてもUIA Aの規格など詳細に説明し、いかにわが社のロウブが優れているかと誇示するごとくであるが、今回問題となつてゐる、剪断とか切断についてはロクに、あるいは全く触れていないものが多い。

「見解」によると、日本の製綱業者のすべてが、製品に対して詳しい説明をしないで売つてゐるかの印象を受けるが、T製綱会社のロウブの説明書（昭和四十七年版）など、ヨーロッパのものにくらべてはるかに立派だと思ふ。「見解」の要求するような具体的な数字は書いてないが、ナイロン・ロウブの欠陥については詳しく説明されている。

さて次は、登山綱を買う側の登山者の場合であるが、「見解」を読むと登山者の大部分はナイロン・ロウブの欠陥を知らないような印象を与えられる。しかし一昨年事故を報じた『岩と雪』一九号の記事によると、雲表倶楽部の田中敏雄氏は「私も昭和三十年正月の前穂高岳でのナイロンザイル切断事件以来、ナイロンザイルは引張り強さに対しては相当の信頼度があつても、剪断力や切削力に対してはほとんど信頼できないものと理解していた」（一六二頁）と述べ、また東電山の会の小沢観一氏は同じく一六六頁で「あるいは二重ザイルを使用していたら、といった反省が脳裏を離れない」とされている。この人たちはナイロン・ロウブの欠陥をよく承知されている。

「見解」はロウブ業者に、詳しい説明書をつけて売るように主張している。ロウブ業者によるロウブの詳しい性能調査はぜひ行なつてほしいし、その内容もあけすけに発表してほしい。欠陥をほかすような発表のしかたは人道に反する。エコノミック・アニマルたるゆえんである。世界中で同一の欠陥を持つてゐる商品売るのだから、欠陥は欠陥として発表し、技術で補つて頂きたいといへば、登山者は気持よくそれを買うだろう。

しかしそれだからといって、ロウブを買う人にいちいち詳しい使用法まで説明しなければならぬか、多少の疑問を持つことは自動車の例で説明した通りである。筆者として、

どんな項目が知りたいか、考えて見たら次のようになった。

製品の名称

材料の種類

長さ

重量

製造年月日

製造者（会社）名

ここまで書いて、ふと東京トップの検査証とくらべて見たら、大体同じ内容であつた。ただ東京トップの場合には、引張り強度とか伸度などという余分のもの（私にはそう思ふのだが）が書いてあるので、かえつて問題にされたのではなからうか。中途半端な説明は害あつて益なし。意地の悪い見方をすれば、餌にひつかつて来るバカな魚を待つ趣である。

なお「見解」では、衝撃的荷重によつて綱の中に生じる応力の強さをあまり問題にしていないが、筆者から製綱業者にとくにお願ひしたいのは、衝撃に対する応力を極力小さくするよう、製法を改良して頂きたいことである。これによつて墜落者の負傷は減り、ピットンが抜ける確率も小さくなるのである。もちろん、これは抗張力や寿命を低下させることなしでの改良である。

### 寿命と融断

次は、これも「見解」では問題にしていないが、筆者としては登山綱を扱うについて最

も大切な点のひとつだと考える、綱の寿命についてである。「見解」が問題にしているのは新品の性能であるが、性能の低下は一律ではない。製綱業者により、また銘柄の違いにより、性能の低下度の違いは、われわれは経験によって知っている。しかしそれを数字に現わして廃棄時期を決めることは難しい。登山者の持っている綱は、使用第一日を除いてすべて中古品である。だからわれわれの知りたいのは新品の性能ではなく、中古品の性能なのだ。

昔ロウプを初めて山で使うまえに、使いやすくするため、湯につけたり、棒でしごいたりした。筆者はこれはロウプの衝撃吸収能力を捨てることだからと厳しく禁じたが、昔のロウプの大部分は、手に負えないほど堅かったのである。制動確保を行なうことは、綱をしごくのと同じである。一回ごとに寿命がすりへっているのである。しかも、次に述べる融断とも関係があるので、ないがしろにできない。

ロウプの廃棄時期については、真面目な登山者は昔から考えているので、いろいろの説はあるがなかなか納得できない。最近では雑誌 Mountain の二〇号に、衝撃試験のときの強さに応じて、使用時間をいくらと決めるような方式や、中古ロウプの破壊試験など紹介されていて、ヨーロッパではなかなか熱心に研究されていることが知られる。わが国の業者や研究者にも頑張って頂きたいと思う。

本誌一九号で安田武氏は昭和四十五年の事

故に関連して「事故ザイルの切断端は融断によるものであると考えられる。しかし、衝撃破壊による融断ではなく、摩擦発熱による融断である」と推論し、ナイロン・ロウプで制動確保を行なうことは、カラビナのような滑らかな物体が仲介に入ったとしても、非常に危険であると示唆されている。これは大変重要な報告である。

もし、この通りだとしたら、ナイロン・ロウプは山では使えないものにならないことになる。恐らくこの報告は三重岳連もロウプ業者も眼にしていることと思うが、ひっそりとほっておかれているのが不思議だ。私は今回「見解」に関連して読んだり考えたりしたところの中で、これが一番の問題のような気がする。失礼ながら安田氏の杞憂であってくれば幸いであるが。

「見解」の主張するような調査研究の必要なことはいうまでもない。しかしそれを商品たるロウプにつけることには多少の疑問があること前記した通りであるが、単純でない自然たる山でのトラブルであるから、後から後へいろいろな問題が現われて来よう。

とすれば「見解」で言及された程度の説明書は、きわめて舌たらずのそしりは免がれまい。大体、売人（製造者を含めて）というものは客をだましやすいためである。こんなことを書いては正直な売人から叱られるかも知れないが、かなり良心的なメイカーでも、素人の客が心配の種にするような問題は伏せておくのが普通である。その商工業者に、

あけすけに商品の欠陥を示した説明書をつけて売れというのは、どうもおかど違いのような気がする。

今後、ロウプの性能が一層詳しく調査され、これが登山者に知らされたとしたら、山でのロウプ切断事故はなくなるであろうか。筆者はそうは思わない。遭難はロウプの物理的性能だけが原因で起こるのではなく、物理的性能の限界以内で用具を使いこなせない登山者の未熟から起こるものである。性能を知るところと、用具を使いこなすということとは、全く別の次元に属する問題である。

「見解」は岩角におけるロウプの危険を主たる問題として取りあげている。これは解明されるべき重要な問題であるが、解明されるまで登山を休業するわけにはいかない。そのときにロウプ切断の予防上最も大切なことは、初めに詳しく論じたように、直接確保をとめて避けることである。ロウプが岩角に触れるのはあたりまえだ、というような態度を捨てない限り、ロウプ切断事故の続発は必至である。

《付記》前号「見解」六四頁には「岩角が相当に鋭くても長さの方向に走ってくれば安心」という文章と同趣旨の記事を、筆者が日本山岳会々報一八七号に書き、一八九号で訂正したとして、篠田氏に対し「この文も当然訂正されなくてはならない」ときめつけている。しかしそのような事実はない。三重岳連の勘違いであろう。

(かねさか・いちろう 日本山岳協会常務理事、用具担当)